車いす卓球

ドキュメント挑戦

妻と磨くプロの技量

プロとしてアテネ・パラリンピックにのぞむ選手がいる。車いす卓球の岡紀彦（40）だ。

四年前のシドニー・パラリンピックでのこと。ベスト16が戦う決勝トーナメントの一回戦で、岡は年上の台湾選手と対戦して敗れた。その三カ月前の別の大会で、この選手には勝っており、彼は楽勝できると思っていたのだ。

「ショックだった。たった三カ月間で、相手が見違えるように強くなっていた。弱点を克服した相手と伸びなかった自分。このままではアテネへ行ってもいい成績は残せないだろう」という危機感に襲われた。

卓球が年齢に関係なく進化できるスポーツだと確信できた半面、アテネでのメダル獲得のためには練習環境を変えなければならぬという反省が生まれた。そして、アマチュアの限界を感じ、プロの道を探り始めたのである。

プロ選手としてアテネに挑む岡紀彦

岡山市出身の彼は、生まれつき骨がもろい「先天性骨形成不全症」の障害を持っていた。何度も骨折を繰り返し、小学校から車いすを使い始めた。中学生になって状態も落ち着いてきたので、卓球を始めた。卓球は球を打ち合うスポーツの中で最も相手に近い。手先の器用さと反射神経には自信があったので、自分に向いていると考えたのだ。

車いすに乗っていても、彼は他の選手に比べて頭ひとつ小さい。そのハンディを克服できたのは、ミスを最小限にとどめる正確さと安定性、さらに相手を徐々に追い込んでいく多彩な球筋があったからだ。

もう一つ、岡山勤労身体障害者体育センターに勤める妻の博子（36）の協力も見逃せない。自宅では、彼女が撮影した試合をビデオで再生し、自分のプレーの欠点を修正したり、外国人選手の特徴を分析するなどの研究も日夜怠りない。

彼は、国内最大の大会である「障害者卓球ジャパンカップ」を二十三歳で初制覇して以来、十七連覇を続けている。国内にはもう敵なしだ。そして、「さらなる高みを目指そう」と、専属コーチをつけて技術を磨くプロへの転向を決意。二〇〇二年に京都の和服メーカーとスポンサー契約を結んだ。障害者スポーツでは、車いすマラソンの土田和歌子に次ぐ二人目のプロ選手の誕生である。

だが、スポンサー契約といえど、遠征費までは面倒をみてもらえない。それまで勤めていた岡山市の会社を辞め、年収は半減した。それでも、「不安がないと言えばウソになりますが、こんなチャンスは二度とない。やらなかったら、悔いが残るでしょう」と、妻もプロへの道を支援する。

彼も、「安定をなげうっても世界のトップになることに価値があると思った。活躍次第では、他の支援企業も出てくるかもしれない。自分のレベルアップが、障害者スポーツの競技性の高さの証明につながるなら満足」という。

アテネの表彰台の真ん中を見据えた岡の戦いがいよいよ幕を開ける。＝敬称略

（編集委員　野村義博）